

空中に浮かんだ男は音もなく空を移動し、そのまま俺たちの前に下りた。辺りの兵たちは感嘆の声をあげ、男に対し深々と頭を下げた。

黒いローブを羽織り、手には装丁がぼろぼろになった本を持っている。本の表紙に書かれた文字は今世界のどこでも使われていない文字、古代文字だった。俺は視力がいいのだ。恐るべき古代の魔法書、禁書だった。

すると、この男が件の魔法使ってわけか。やれやれ、まさか御大将自らお出ましとは。俺の予定は狂いっばなしだ。

俺の予想は当たったようだ。デイトリンデがその男をもの凄いい形で睨みつけている。まるで、仇を見るような目つきだった。あ、本当に仇だった。デイトリンデは、この魔法使いに親を殺されているのだ。

俺の顔も険しくなった。義憤にかられたわけじゃない。俺のは嫉妬だった。野郎、いい男じゃねえか。ローブに包まれた体は均整が取れ引き締まっていた。顔は彫が深く整っている。絵に描いたような美丈夫だった。

「そなたらなかなか使うそうだな。王というのものなかなか暇でな、退屈しのぎに少し相手をしてやろう」

魔法使いはいった。どうやら、兵の中に律儀に報告しに行った奴がいたらしい。

「王だと！貴様が!!」

デイトリンデは叫んだ。

「む、貴様、いやあなたは……」

魔法使いはデイトリンデを見つめた。

その逞しい腕を。日に焼けた顔を。

「……姫????」

「何でそんな盛大に疑問なのよ」

デイトリンデは苦虫をつぶしたような顔だ。俺は、うんうんとうなずいた。どちらに対する賛同かはわからない。

「どうやら私を倒すため、随分と研鑽を積まれたようですね」
かつての深窓の令嬢の頭から足先まで、見つめて魔法使いはいった。

「好きで強くなったわけじゃないよ」

デイトリンデにじろりと睨まれ、俺はあらぬ方を見た。

「とにかく……覚悟なさい」

デイトリンデは気を取り直すようにして、呟いた。

「父の仇、今ここで討つ！」

デイトリンデは剣を正眼に構えた。

みるみる気迫がみなぎっていく。闘気がオーラとなって見えるほどだ。

ほう、俺は感心した。今でこそ役立たずの俺だが、本来は一流の戦士である。見る目は今でも健在だ。その俺から見てもデイトリンデの強さは本物だった。

こいつはひよっとしたら、ひよっとするかもしれない。このまま俺の出番はなしか。

一喝と一閃、ほぼ同時だった。

無骨な大剣は、一筋の光と化した。

光は黒い魔法使いを切り裂いた。

だが、それは残像だった。

大剣を切り下ろしたデイトリンデの背後に、魔法使いがいた。魔法使いは酷薄な笑みを浮かべていた。

轟音と稲光がデイトリンデを襲った。

魔法使いが電閃ドナーの呪文を唱えたのだ。

電撃を食らい、デイトリンデは短い悲鳴をあげ地面に倒れこんだ。俺の見立ては甘かった。確かにデイトリンデは剣士としてすでにひとかどだった。だが、魔法使いの強さは、それ以上だ。はっきりいって段違いだ。圧倒的だった。デイトリンデではどう逆立ちしてもかなう相手じゃない。さすがは第一類きんだんのしょの魔法使いだ。

「その程度でどうにかなると、お思いか。ここにあるは禁断の魔

道書。魔界の王すら呼び出し、従わせるも可能な魔道書なのでぞ」
高らかに笑う魔法使いにデイトリンデは顔をあげ、にらみつける
のが精一杯だった。

「安心なさい。殺しはしない」
魔法使いは優しげに微笑んだ。

「その血統、利用させていただく。殿下は姉君たちと違い、ご結婚はまだでしたな。この国を効率よく治めるためには、旧王家を取り込むのが一番！」

「あなた、私を……！」

「そう、あなたには私の……つ、つ、妻に……」

「コラア！そこ何でためらった!?!」

元深窓の令嬢は齒軋りした。俺はやっぱり、うんうんとうなずいた。
と、漫才聞いている場合じゃない。次は俺の番だ。

「さて、お主はもう少し我を楽しませてくれるのであろうの」

魔法使いは俺に尋ねた。

こういう時は思い切りが大事だ。

おれはいった。

「いやあく、お強いですね。ワタクシめ大変感服いたしました。

私などがお相手するなどは、とてもとても」

俺は揉み手しながら、笑いかけた。それはもう揉みに揉んだ。

「何でもしますから、お仲間に入れていただけませんかええ。」

いやホントに何でもしますんで」

ここは時間稼ぎの一手だ。時間制限タイムリミットが解けるまで、あと二十日。

それまでは仲間になっても、時間を稼がなくては。

デイトリンデからの視線は刺さるほどに痛い。だってしょうがねえだろ。

もっとも、俺はここで戦いになってもいいかな、と少しは思っていた。本当だ、強がりじゃない。

俺の能力のことを考えると、ここで戦っても問題はない、多分。

ただ、戦わなくても問題は無い。だったら戦わないに限る。俺だって痛いのは嫌なのだ。

俺のおべっかに魔法使いはクールにフツと笑った。無論、目を閉じたままクールにフツ、だ。

こういう奴はええカッコしいだからな、仲間にはしないまでも命は取らないで見過ごすことは大いにある。ケツ、いい気になってろよ、二十日後、力を取り戻したらおまえなんぞ……。

俺の体を氷の刃が貫いていた。

「!? な、何で」

俺は口から血の泡を吹いた。気づいた時には体中を氷の刃が貫いていた。氷刃の呪文だ。

「その手は食わぬよ、勇者殿！」

魔法使いはいった。畜生、俺が勇者だと気づいていやがったのか。

「派遣協会からの者、必ず来ると思っていたぞ」

魔法使いは笑った。俺を待ちわびていたわけか。道理で、ちょっと強い侵入者が現れただけで、大将自ら出向いてきたわけだ。

「おそらくは限定解除までの時間稼ぎだったのだろうが……。哀れだな。飼い馴らされた勇者は。自分の自由に力も使えぬというのだから！」

魔法使いは高笑いしている。ただ、俺の耳にはもう耳障りな笑い声も遠いものになりつつある。口の中は吐いても吐いても血が溢れ出てくる。傷の痛みよりも息が詰まり、それが苦しい。俺はたまたら大量の血を吐きだし、膝をついた。こりや、もう長くない。

悲痛な声をあげ、デイトリンデがこちらへ駆け寄ろうとしている。魔法使いは一喝、暴風の魔法を唱え、デイトリンデを吹き飛ばした。

「ハッ、そこでおとなしく見ておれ。希望が潰えるさまをな！」
魔法使いは呪文を唱えた。業火だ。

俺の頭上で巨大な火の玉が燃え盛っていた。火の玉は直接触れてないのに、既に俺の髪は燃え、皮膚は焦げ出していった。

そして、火の玉は俺の上に落ちた。

最後に耳に聞こえたのは、デイトリンデの叫びだったろうか。

地獄の業火にも例えられる魔法の炎は、俺の髪を皮膚を肉を目玉を内臓を全て燃やした。

俺は死んでしまった。